

リアスの風

河北新報気仙沼地域版

2016年(平成28年)12月10日(土曜日)

沼 仙 気 水産業楽しく学ぶ 6小学校食育授業スタート

気仙沼市の水産会社などでつくる「気仙沼の魚を学校給食に普及させる会」(日井壮太郎代表)による食育授業が1日、始まった。21日まで市内6小学校で実施する。今回は、同会がウェブサイトに作成した気仙沼の水産業を学べる画面をタブレット端末で見ながら行われた。児童は手元の端末を操作しながら、楽しく魚や水産業を学んだ。

この日は、唐桑町の中井小(小松英紀校長、児童69人)の5年生12人が授業を受けた。初めに唐桑海友会長で元マグロ船乗組員の伊藤博さんが魚を追って世界中を回り、はえ縄漁をした様子を話した。

児童から「船で困ったことはないのか」と質問されると、伊藤さんは「エンジンが故障したり、燃油が底をついたりしたこともあっ

た。故障は乗組員全員が力を合わせて直し、燃油は海の仲間に助けてもらった」と当時を振り返った。

その後は、県北部鯨鮪漁業組合事務局長の菅原和昭さんが「気仙沼の魚をおいしく食べられる幸せ」をテーマに「普及させる会」が開発した「メカジキメンチコロッケ」が給食として出されるまでを説明した。



タブレット端末を使って行われた食育授業

菅原さんは「漁師が海で捕ったメカジキが水揚げされ、加工される。それを給食センターに運び、調理する。多くの人が協力して、みんながおいしく食べることでできる」と話した。

児童たちは、タブレット端末のイラストやグラフなどを見ながら、多くの人が携わっている気仙沼の水産業について理解を深めていた。

最後は牛脂と魚油を入れた瓶を氷水に浸し、牛脂が固まるのに魚油がサラサラしているのを体感。魚には体にいい成分が含まれていることを肌で知った。

授業を受けた小山愛梨さん(11)は「漁の大変さが分かったし、多くの人がおいしい魚を届けるために働いていることを知った。魚をもっと大事に食べたい」と感想を話した。